

びという事柄を如何にして自己の問題として回復してゆくかということがこの講義集の全体を貫く根本課題としてあるのであり、そのことゆえに各々のテーマの究明がなされているのである。だから読者は、其々の巻を読むごとに、「あなたの仏教の学びはあなたが如何に生きるかということを明らかにしてゆく学びと成っていますか？」と尋ねられ続けるのである。

尚、この講義集には下記の二巻の刊行が予定されている。第六巻「新しき仏教者の像——無戒名字の比丘——」、第七巻「真宗教の道理——廻向論——」。

(四六版・平均二〇〇頁・文栄堂・各巻一八〇〇円)

(藤嶽明信)

小川一乘著

### 『佛性思想』

本書は、長年に亘ってインド大乘仏教における仏性の問題を研究課題としてきた著者が、仏性思想を学ぶことを切望する人々に向けて自らの仏性思想に対する理解を吐露された好著である。「まえがき」によれば、昭和五十六年度の大谷大学における講義「仏性思想の研究」のノートに補訂を加えたものが此度、公刊の運びとなったことになる。すでに著者には『宝性論』やその積疏を著したチベット人学僧ダルマリンチエンに関する解説研究として『インド大乘仏教における如来蔵・仏性の研究』(文栄堂・昭44)がある。この学問的労作を基本としてその中の難解な部分を書き直しつつ仏性思想についての学問的説明が平易になされているのである。以下に本書の内容を概観することとする。

序章は、仏性思想を説明するにあたっての前提が示される。従来の多岐に亘る仏性思想研究のあり方をふまえて、本書の主眼が、インドチベットの潮流としてのインド仏教における仏性思想、すなわち『宝性論』の仏性思想を説明することを書き記している。

第一章は、仏性思想に対する問題提起である。「心性本浄」「自性清浄心」「悉有仏性」という場合、およそ仏教であるかぎりその実体性は否定されねばならず、つねに仏性とは何か、悉く仏性を有するとはどういう意味かという基本的な問いが必要であることを指摘する。

第二章と第三章では、『宝性論』等に表われる「仏性」という語に相当するサンスクリット原語の吟味、そして基本的命題としての「悉有仏性」の意味が検討されている。『宝性論』には、その意味が「法身遍満」(如来の慈悲的な宗教的事実)、「真如平等」(如来の智慧的な根源的事実)、「有仏種性」(仏道実践における自覚的事実)という三理由によって明されるが、これは「悉有仏性」が大乘の仏道体系にかなった意味を有することが明らかにされている。

第四章は、仏性思想が大乘仏教においてどのような思想的立場にあり、また『宝性論』に何故に仏性思想が説かれなければならなかったのが究明される。

第五章より第七章までは、「悉有仏性」と密接な関係にある「空性」「常楽我淨の四波羅蜜多」「一闍提」について綿密に所論が展開されている。とくに第五章は、前章における仏性思想の思想的立場づけによって示された般若空観との関わりをうけて、『宝性論』の空性は悉有仏性と矛盾するものではなく、仏性が本性空性ということにおける最も本来的なあり方としての諸空においてのみその存在性が説示されるべきであることが明確にされている。

結章では、仏性思想の本意は、般若空觀を基本とした智慧とそれはたらぎとしての慈悲との二つの事実を表明したものであるとし、仏性思想における「悉有仏性」の意味が、大乘としての「悉有仏性」にほかならないことが明らかにされるのである。

(B 6 版・一七〇頁・文榮堂・一九〇〇円)

(一色順心)